

今狩猟シーズンの狙いはカワウ!

文 木村安兵衛

Text by Yasube Kimura

世

間ではコロナ第8波が叫ばれる最中、季節は着々と移りいき、いよいよ狩猟のシーズンが始まりました。通常では11月15日より狩猟が始まるのですが、私は一足早めに有害鳥獣駆除のお手伝いをするという名目で鉄砲を担いで和歌山に入ります。狙いはカワウと鹿。

鶉という鳥にはウミウとカワウがいます。ウミウはその数が減少しているので「保護」の対象ですが、カワウは生息数がたっぷりある。さらに大量の魚を飲み込んでしまう大食漢であります。特に鮎が大好物。鮎釣りのメッカである清流では害獣に指定されるほどの嫌われ者です。

私は日の出45分前に河原の茂みの中に全身迷彩姿で身を潜めます。河原に人間が現れると、それまでのんびりしていたサギが逃げていきます。身を潜めて20分、私の頭の上をトンビやミサゴといった小型の猛禽類が旋回を始めます。そのころから茂みに隠れて生活する小鳥たちがピーピー、チチチと朝の挨拶をしているかのように鳴き始めます。

しばらくすると警戒心が解けたのか、サギが舞い戻り羽を休めます。時刻は

日の出10分前。遠くからワサワサという大きな羽音の軍団が近づいてくるのです。カワウの大群がやってきました。それは羽が空気を捉えるというよりは、羽を動かす筋肉の躍動する音かと間違えてしまうほどの近距離であります。しかし、残念なことに日の出時刻前の発砲は禁止されており、指をくわえて見ているだけあります。気分は外国人スパイを見つけても逮捕できない公安警察という感じであります。

日の出時刻を過ぎると、そこはもう撃たれることのない鳥類だけがいる幸せな空間になっていました。落胆している川上から突然羽の風切り音の大群が頭上を過ぎていきます。先ほどのカワウの大群が餌場を変えるのでしよう、舞い戻ってきたのであります。私は迷わずに発砲します。敵飛行機来襲に対抗する戦艦の艦砲射撃であります。ドコン!という発砲音とともに空中で羽が散ります。しかし、落ちて来ない。俗にいう「スカを撃った」です。カワウや鴨のような水鳥は銃撃に強い体を持っていきます。矢ガモといった弓矢で射られた鴨が平気な顔をして公園で泳いでいることから想像できます。特にカワウの体の頑丈さは鴨などとは比

べものにならないほど強いのです。

艦砲射撃をひとしきり撃ち終え、成果も出ずにトボトボと歩いていると「誰だ! 鉄砲撃っているのは!」という大きな声。地元の動物愛護家か? はたまた朝っぱらからうるさいという苦情か? いずれにしても怒られるのだろうか?と覚悟をしていると、「なんだ木村さんじゃないか。朝からカワウを追い払ってくれている人がいるから漁連を代表してお礼を言いに来たんだよ!」

よかった! 怒られなかった。まあ1羽も殺していない私は動物愛護家ですが。

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA(米国食品医薬品局)研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社ブルーランジェリーエリックカイザージャパンを設立。2001年メゾンカイザー1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2020年現在41店舗を数える。

